

## チャンドラ・ボースの遺骨

宮原 豊 (9組)

今回はインド独立のもう一人の英雄チャンドラ・ボースのことを紹介したい。

戦時中、日本とも関りが深いスパース・チャンドラ・ボースの名前を聞いた人は多いと思うが、その後チャンドラ・ボースはどのようになったのか、案外知られていないのではないかな。

チャンドラ・ボースは 1938 年会議派の議長を務めていた時期に、「英国統治からの武装解放」を主張し、国民を驚かせもしたが、大いに熱狂させた。しかしながら、ガンディーの非暴力不服従運動を展開する会議派主流からは危険分子だとして離反させられた。自宅軟禁の際をついて脱走し、インド独立への可能性をドイツに探ったが、ドイツと組むという企ては成功せず、次にボースは大日本帝国に目を向けた。

日本国内で対英独立を目指して活動していたインド人グループ(例えば中村屋のボースとして知られるラース・ビハリ・ボースなど)と呼応し、日本軍の手引きでドイツの潜水艦 U ボートでヨーロッパを脱出、アフリカのマダガスカル沖で日本軍の潜水艦に乗り換えてアジアに戻り、1943 年の東条首相の招きで大東亜共栄会議に出席した。チャンドラ・ボースはシンガポールに暫定政権を建て、マレー半島のインド人を糾合してインド国民軍(INA)を結成し、1944 年日本軍と共にインパール作戦を戦った。

1945 年 8 月 15 日に日本敗戦を聞いて、別の道を模索する中、8 月 18 日に台湾の松山空港で事故死した。このチャンドラ・ボースはネタージ(指導者)と呼ばれ、今もインド国民の間に真の英雄として根強い人気がある。

さて、その後であるが、チャンドラ・ボースの遺骨は日本軍関係者により日本に持ち帰られ、紆余曲折を経た後に東京・杉並区の蓮光寺に安置された。毎年 8 月 18 日の命日には、ボースに縁のあるインド人や日本人関係者が多数集まり、盛大に供養式が執り行われている。



(写真は蓮光寺のボース像の前で。右はボースの通訳を務めた根岸氏の長男)

それから 70 有余年、遺骨をインドに返還しようとする再三の働きかけにもインド政府は意思を明確にせず、今も蓮光寺に安置されたままである。2014 年にモディ政権が誕生した後、一昨年あたりにはインド国内でも返還に向けて具体的に動き出す機運が高まった。遺骨返還のために真贋をはっきりさせたいので DNA 鑑定をすべきであるとか、いや 70 以上も経てそもそも DNA 鑑定は不可能ではないかと疑問を呈する声もあり、未だに返還の目は立たない。

ヒンズー右派の狂信者には「ネタージはまだ生きている」と信じている人さえいるが、彼らはネタージが自分たちのために再起し、自分たちの権利を取り戻してくれる(ヒन्दウーのために戦ってくれる)と信じているようだ。だから、たとえ遺骨であっても、「ネタージがインドに戻って来る」ことになれば、ヒンズー右派の人々に強すぎる劇薬を与えるばかりでなく、それを核にして多くのインド人を熱狂させることは間違いない。

ガンディーの「非暴力不服従」による独立達成はインド人に強い愛国心を抱かせてくれたし、それによりインド人は「世俗主義」と「民主主義」を国是とするインド共和国を建設したと言える。ある意味バランスがよいように思われる。例え今の政権がヒンズー右派に近いインド国民党(BJP)政権だとしても、チャンドラ・ボースの帰還による国民の熱狂がどこに向かって行くか分からない政治的リスクを軽く見ることはできないのだろう。ヒンズー極右の発する民族主義の熱気はインドにとって今も火山だまりの溶岩のようだ。インド人の心は本当に熱い。(2018.2.9)